２０２４年6月９日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ４９「愛を満たす祈り」
詩編１０３：１７～２２、ルカ２２：３９～４６

問１２４第三の願いは何ですか。
答　「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」です。すなわち、わたしたちやすべての人々が、自分自身の思いを捨て去り、唯一正しいあなたの御心に、何一つ言い逆らうことなく、聞き従えるようにしてください、そして、一人一人が自分の務めと召命とを、天の御使いのように喜んで忠実に果たせるようにしてください、ということです。

先日、ある知り合いの方と話をしておりましたら、その方が「結局、信仰というのはいかに自己抑制できるかということではないか」と言われました。その人いわく、「教会では御心を中心にしないといけない。そこでは自分の思いをいかに抑制できるかということにかかっている」のだと。でも果たして信仰は自己抑制することなのでしょうか。今日の信仰問答でも「自分自身の思いを捨て去り」とありました。これは自己抑制でしょうか。もしわたしたちが神さまを信じることで、何かを我慢しなければならないとするならば、そういう信仰は続かないと思いますし、信じることがだんだん辛くなってくると思うのです。

そもそも人間は自己抑制などできないし、自分を制御して御心を中心になどできない存在です。わたしたちはいつでも自分中心であり、自分の思い通りにしようとします。ともすると、自分の願望がイコール御心だと思うほどに傲慢です。教会に来て一瞬は神さまを中心にしようと心改めるかもしれませんが、結局、人間の思いに負けて、この世に流されていくのです。それどころか御心に反して、神さまに逆らっていく。この繰り返しではないでしょうか。信仰問答の言葉で言えば、「どのような善に対してもまったく無能であらゆる悪に傾いているというほどにわたしたちは堕落している」（問８）のです。このことをキリスト教の教理では全的堕落と言います。

そしてそのようなわたしたちが、自分の思いを捨て去り、「神中心」「御心中心」に生きることができるとすれば、それはわたしたちの努力ではなく、わたしたちが全く新しく生まれ変わらなくてはならない。それが信仰問答で言うところの「古い人の死滅と新しい人の復活」（問８８）です。わたしの中に新しい人が復活し、立ち上がってこなければならないのです。ですから、信仰とは自分を抑制するとかしないとか、そういう次元の話ではありません。このわたしを新しく生まれ変わらせてくださる神さまの救い、恵みによるのです。

ヨハネ福音書に次のような御言葉があります。「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである」（６：３８）イエスさまが来られたのは、父なる神さまの御心を行うためです。神さまの御心が天にあるように、地にもこれを行き渡らせる。そのためにイエスさまは神さまの御心としてこの地上に来られました。福音書によれば、イエスさまが洗礼をお受けになられた時に「天が裂けて霊が鳩のように御自分に降って来るのをご覧になった」（マルコ１：１０）とあります。これはまさに天が裂けて、神さまの御心が地上に現れ出たことを示しています。さらにイエスさまの十字架の死に際して、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。神さまと人間とを隔てる中垣が取り除かれました。そこからまるで堰を切ったように御心が地上に現れ出たのです。

神さまの御心は、そのようにしてイエスさまがご自身の体を裂いて、ご自身の命を通して現されました。それ以外に御心はないと言わなければなりません。ヨハネの手紙に「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」（Ｉヨハネ４：９～１０）イエスさまがその体を裂いて現してくださった神さまの御心は愛です。その神さまの愛を天になるごとく、地にもなさせたまえとわたしたちは祈るのです。

そして、わたしたちが御心を中心に生きることができるとすれば、それはこのイエスさまに結ばれること、洗礼を受けて、イエスさまの命にあずかること。それによって罪に死に新しい命に生まれ変わることしかありません。「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」とは、わたしたちがイエスさまに結ばれて、よみがえりの命に生かされ、神さまの愛に満たされて生きることです。そして、それが信仰問答で言うところの「天の御使いのように」なることなのです。「一人一人が自分の務めと召命とを、天の御使いのように喜んで忠実に果たせるようにしてください」この地上においては、完全に御使いになれるわけではありませんが、御使いのようにはなれます。それは決して我慢して、自分を押し殺して、無理をして生きることではありません。自らの意志で、喜んで、神さまの御心を現すために生活する。わたしたちには、そういう生き方がすでに与えられているのです。

先週は、阿蘇にお住いの大滝ナホミ姉を天に送りました。かつての内牧集会の全盛期のメンバーの最後の一人と申し上げていいでしょう。阿蘇は、なかなかキリスト教の伝道が難しい地域です。阿蘇神社があります。お寺も強いところです。教会員で熱心に教会に通っておられたにも関わらず、最後は仏式で葬式をしなければならなかった方々が何人もおられます。しかし、そういう土地に先人たちは分入って福音を伝えました。あとでお聞きしましたら大滝ナホミさんも阿蘇神社に縁のある家系にあります。けれどもナホミさんはイエスさまに結ばれて「天の御使いのように」７０年の信仰生活を貫きました。葬儀には、ナホミさんのお友だちがたくさん駆けつけてくださいました。会場に溢れるほどに、部屋の外に椅子を並べないといけないくらい人が集まりました。それだけナホミさんが阿蘇の人々に愛されていたからです。ナホミさんが天の御使いのように神さまの御心を生きたからです。阿蘇を離れず、その土地を愛し、人々を愛した、そのナホミさんによって、阿蘇の地は、天のごとくみこころの現れるところとなりました。

天の父よ。あなたの御心をこの地に現すべく、天の御使いのように生きることを許してくださいますこと感謝いたします。一人一人がその自覚を持って、この世での務めを果たすことができますようにお導きください。主の御名によって祈ります。アーメン。